

書評 Review

名所旧跡・街頭風景の今昔 ニッポン時空写真館 1930-2010

岡橋秀典¹

Space-time Photo Gallery of Japan between 1930 and 2010:
Past and Present of Streetscape and Landmark

Hidenori OKAHASHI

二村正之. 2011. 誠文堂新光社, 東京. 212p. ISBN978-4-416-91100-6, 2800 円 (税別)

本書は、日本の風景の変貌を、同一箇所の 80 年前と現在（2000 年代初頭）の写真と比較することにより示そうとしたものである。地図により地域の変貌を追った研究は、平岡昭利氏の編集による『地図で読む百年』シリーズの労作などがあるが、写真でこれほど大量に、しかも全国的に地域変化を示したものはなかったように思われる。ページごとに、上段に昔の写真、下段に現在の写真を配し、それぞれに短いキャプションを付している。ページをめくっていくと、北から順に北海道から沖縄まで、200 カ所に及ぶ名所旧跡・街頭風景が万華鏡のように次々と現れてくる。まさにタイトル通り、「時空写真館」に入ったような気分させてくれる本である。

このすばらしい企画がどうして実現したのかを説明しておきたい。まず、80 年前を示す写真はすべて、『日本地理風俗体系』（新光社刊）から転載されている。私にとっても背表紙に何となく見覚えのある本であるが、著者が冒頭に記しているように、これを「発見」したのがうれしい出来事であったという。そして、この貴重な写真を埋もれさせず再び生かすために、同一ポイントで同じアングルにより撮影して今昔を比較できるようにすることを考えつかれたのであろう。生来の旅好き、写真好き、そして大学で地理を専攻されたことのある著者であればこそ、実現した企画だと思われる。それにしても、同じビューポイントで写真を撮ることは、大変困難な作業であったに違いない。足掛け 7 年を要したというこの作業は、地図を丹念に読み、地元の住民に聞き取りをし、そして現場を歩き回るといふ、手間のかかるフィールドワークなしには実

現しなかった。そして、私も地理学者であるから容易に想像がつくが、著者はその過程に大いに喜びも感じておられたことであろう。それゆえにこそ、継続は力なりといえるだけの成果につながったに違いない。

さて、内容に入ろう。ここに示された豊かな風景写真群は、我々日本人にとって、この 80 年が何であったのかを様々に考えさせてくれる。何を読み取り、どのように考えるかはまさに自由であろうが、筆者が気づいたことを簡単に述べておきたい。本書は、名所旧跡・街頭風景に焦点を当てているので、橋、商店街、城、神社、寺が景観要素として目立つ。橋の変貌はこの間の変化を最も良く象徴している。かつて歩行者が中心であった木造橋は、今や自動車が行き交うコンクリートの橋に変わっている。自然にとけ込んだ木造橋の美しさが特に目を引くが、洪水時には自然に圧倒されそうになる橋の状況にも想像力が及ぶ。商店街の変貌も印象的である。多くはアーケードが設置され、道も舗装され、景観的にずいぶん立派になっているが、何となくにぎわいがなくなっているように見えるのは私の錯覚だろうか。都市における中高層建築物の増加は著しく、景観は継続性が確認できないほどに激変している。同一箇所を探すのはさぞかし困難だったに違いない。工業化がいかに景観を大きく変えたかは田子ノ浦の写真が明瞭に物語っている。ただ、1930 年頃には既に工業化が進行し公害問題も生じていたことが、黒煙が立ち上る八幡製鐵所や富士山麓の製紙工場の写真からうかがわれる。これらに対して、城、神社、寺が主題となる風景では景観の変化が少ない。奈良の春日大社、伊勢神宮の五十鈴川、大津の三井寺では基本的

¹ 広島大学大学院文学研究科：Graduate School of Letters, Hiroshima University

に景観がよく保たれ、そこを歩く人々の様だけが大きく変わっている。架橋問題で揺れる福山市の瀬の浦も、この80年間に景観がよく保全されてきたことが一目瞭然である。全編を通して山の様子に注目すると、どこでも貧相であった森林植生が今は深い緑に覆われていることも印象的である。

本書からは、この80年間に、自然に埋め込まれていた日本の景観が、自然を圧倒するかのような人工景観に転じていったことがよくわかる。我々の自然環境とのつきあい方にも大きな変化が生じていることは明らかであろう。本書は、東日本大震災に圧倒され困惑している我々に、この80年間に何であったのかを、静かに語りかけているように思われる。

渡辺一雄広島大学名誉教授は冒頭の推薦文「残像一

憧れと執着」で、「この本は、その「人間の営みへの思いやり」をそこはかたく感じさせる。子供や若者たちも、一瞥すれば、この豊穡さを感じ取るのではないだろうか。」と述べている。読者は、この時空写真館に入り込み、様々な時空旅行を体験し、人間の営みに思いを馳せることができるであろう。それこそが著者のねらいかもしれない。であれば、このような書物の形式ではなく、実際に展示する形でも見てみたいものである。

最後に、改めて著者の努力に敬意を表するとともに、多くの方が日本の諸地域の変貌にこの書物を通じて対峙されることをお勧めしたい。

(2011年8月31日受付)

(2011年11月18日受理)